

行動規範

地球環境への貢献

私たちは、自然の恵みに感謝し、資源の有効活用と環境保全に真摯に取り組むことで、持続可能な社会を次世代につなぎます。

キューピーグループのアプローチ

キューピーグループの事業活動は、原材料をはじめとした豊かな自然の恵みのもとに成り立っており、事業活動が与える自然への影響へ十分に配慮し、将来にわたってこれまでと同様の環境を残し、次世代に引き継いでいく使命があると考えています。

キューピーグループでは、環境基本方針を「生産から販売の全ての活動と商品で、環境への配慮に努めます。」と定め、その行動指針に基づき、グループ各社が目標を定めて環境保全活動に取り組んでいます。2016年度からの中期経営計画では「資源の有効活用」「地球温暖化の防止」「自然環境の保全」の3つを活動の軸としました。

環境マネジメント

環境保全の考え方

キューピーグループは、国内外での環境保全の意識の高まりを受けて、1998年12月に「環境基本方針」を制定し、事業における環境への配慮に取り組んできました。その後、「環境理念」「行動指針」からなる「環境基本方針」は2度の改定を経て、グローバルなキューピーグループの方針としてきました。

～環境理念～

生産から販売の全ての活動と商品で、環境への配慮に努めます。

行動指針

1. 省資源、省エネルギー、廃棄物の削減、再資源化の推進と技術開発に努めます。
2. 環境への影響に配慮した商品開発と、容器包装の適正化を推進します。
3. 自主的な基準を定めて環境保全に取り組み、法規制の遵守はもとより社会的要請に応える環境管理体制の整備と充実を図ります。

2015年、国連サミットで持続可能な世界を実現するために国際目標として、SDGs (Sustainable Development Goals) が合意されました。また、気候変動に関するパリ協

定が採択され、企業が事業活動を通じて環境負荷低減に取り組むことへの期待が高まってきました。キューピーグループは、このたび「CSRの基本的な考え方」をまとめ、「CSRの重点課題」を設定しました。SDGsとパリ協定がめざす中長期での目標をふまえ、計画策定とその実践を進めていきます。

環境保全推進体制

これまでキューピーグループでは、各本部およびグループ企業の環境管理責任者によって構成される環境委員会を設置し、グループ全体の環境保全活動を促進してきました。

2017年度には、環境委員会を基盤として新たにCSR委員会を発足しました。CSR委員会は、グループ全体の社会・環境活動の推進を担っていきます。

CSR委員会は「CSRの重点課題」の解決に向け、環境面では「資源の有効活用と持続可能な調達」「CO₂排出削減(気候変動への対応)」の2つの重点課題に取り組んでいきます。各課題の解決に向けた部会を設置し、目標や取り組みを検討していきます。

ISO14001 認証取得状況

キューピーグループでは、環境保全活動のPDCAサイクルを回すための基本ツールとして、各事業所でISO14001あるいはこれに準じた独自のシステムを導入しています。グループ生産82事業所中29事業所がISO14001 認証を取得しています(2017年11月末現在)。

環境法規の遵守

キューピーグループの各事業所は、各国・地域ごとの環境法規への対応を適正に行っています。

2017年度は、関連法規等の違反や事故の発生はありませんでした。

環境監査

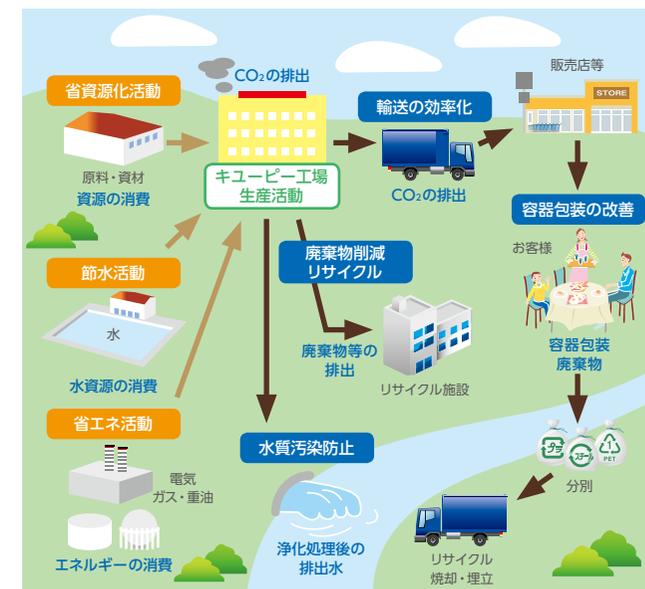
キューピーグループは、関連法規等の遵守、管理推進体制の整備、施設管理状況等についての基準を定め、年1回の内部監査を実施することで、それらを徹底するとともに環境保全活動を推進しています。このほかISO14001 認証取得事業所では、規格に基づいた外部機関による審査を受けています。

事業活動における環境影響

キューピーグループでは商品の生産工程において、原料・資材・水などの資源や、電気・ガス・重油などのエネルギーを投入し、産業廃棄物や排水、CO₂などを排出しています。また、商品輸送時のエネルギー使用に伴う環境負荷や、お客様のご使用後に容器包装廃棄物も発生します。

そうした事業活動に伴う環境への負荷を正しく認識し、商品開発、原資材調達、生産、販売、物流のすべての活動で、持続可能な地球環境に配慮し、省エネルギー・省資源、廃棄物削減、容器包装の改善、輸送の効率化、汚染防止などの環境保全活動を推進しています。

キューピーグループ生産部門における物質とエネルギーの流れ



バリューチェーン全体で、資源の有効活用に取り組んでいます。

キューピーグループ生産部門における物質とエネルギーの流れ (2017年度)

インプット		アウトプット	
エネルギーの使用		大気への排出	
購入電力	2,427千GJ (243,776千kWh)	CO ₂	203.4千トン
燃料*1	1,544千GJ	NOx	40.8トン
エネルギー合計	3,971千GJ	SOx	10.8トン
水の使用		水域への排出*2	
水(地下水、水道水)	10,021千m ³	排出量	7,226千m ³
		廃棄物の排出	
		排出量(再資源化率)	60.3千トン(95%)

*1: 発電燃料含む
*2: 河川、公共下水道含む

対象: キューピーグループ生産工場



地域への環境配慮

キューピーグループの生産事業所では、近隣にお住いの皆様や、地域の環境に配慮して操業を行っています。

● 水質汚濁の防止

排水処理設備で浄化処理後の排水は自主管理基準を定め、水質等を管理し、地域ごとの基準を遵守しています。また、液体原料・燃料のタンクなどには漏洩防止設備を設置するとともに、万が一の公共水域への排出、地下浸透などを想定した訓練を行っています。

● 大気汚染の防止

ボイラーやコジェネレーション等は、適切な運転管理に努めるとともに、定期点検・メンテナンス、ばい煙測定を実施しています。また、ボイラー等の燃料についても、ばいじんや硫酸化物の発生が少ないガスへの転換を進めています。

● 騒音防止と臭気対策

排水処理や調理の際に発生する臭気対策として、工程改善や脱臭装置の整備を行っています。また、騒音防止のため、防音壁の設置や設備導入時の騒音評価、従業員や納入業者への指導等を実施しています。

資源の有効活用

生産・商品設計における資源の有効活用の考え方

キューピーグループは、環境活動の3つの軸のひとつ「資源の有効活用」として、生産および商品設計に関する取り組みを進めています。生産では、廃棄物の削減と食品残さの有効活用に取り組んでいます。商品設計では、容器包装の軽量化、簡素化や、賞味期間延長による流通・消費段階における食品ロスの低減に取り組んでいます。

廃棄物排出量の削減

キューピーグループは、製造工程における歩留まりの改善や、容器包装の改善などによる廃棄物の発生抑制を第一として取り組んでいます。

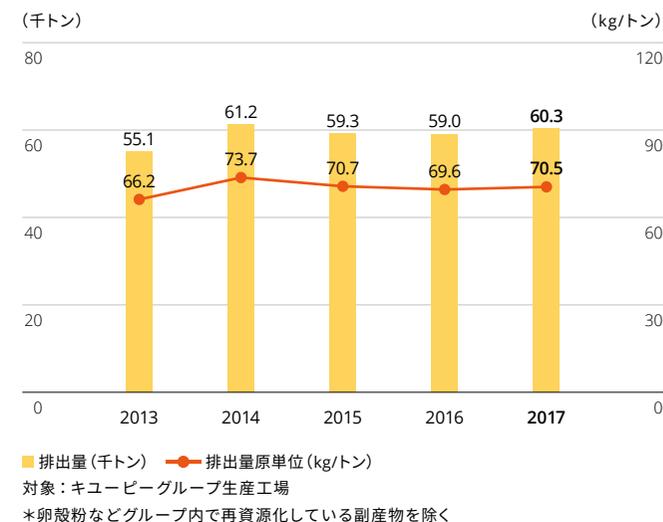
工場の主な廃棄物は、製造工程から排出される食品残さや包装資材のロスとしての廃プラスチック類、排水処理設備における排水処理後の汚泥などがあります。

廃棄物排出量の削減目標

- 総量および生産数量当たりの原単位 前年比減

2017年度は、キューピーグループ工場での廃棄物排出量は、総量60.3千トンで前年度より2.2%増加、生産数量1トン当たりの廃棄物排出量(原単位)は70.5kgで前年度より1.3%増加となりました。

廃棄物排出量*



再資源化の推進

キューピーグループは、卵殻の肥料化や野菜の未利用部位の飼料化などの食品残さの社内再生や、廃棄物等として外部に再資源化を委託することにより、工場が発生する廃棄物等の再資源化率100%(単純焼却・埋立て処分ゼロ)に取り組んでいます。

2017年度の再資源化率は95%となっています。また、再資源化率100%達成工場は、グループ生産82事業所中28事業所となっています。

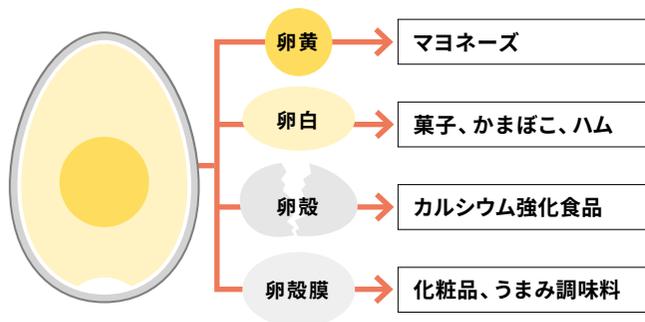
卵の再資源化

キューピーグループでは、マヨネーズ以外にもさまざまなタマゴ加工品を生産しており、日本で生産される卵の約10%を使用しています。

「キューピー マヨネーズ」は、卵の黄身を使用し、卵白はかまぼこなどの水産練り製品や、ケーキなどの製菓の食品原料として使われます。

また、年間約2万8千トン(2017年度実績)発生する卵殻は土壌改良剤やカルシウム強化食品の添加材などに有効活用し、100%再資源化しています。卵殻膜は、化粧品やうまみ調味料などへの高度利用に取り組んでいます。

卵の有効活用



野菜の再資源化

キューピーグループでは、サラダ・惣菜の加工時に生じる野菜の芯やへた、外葉や皮などの未利用部位の有効活用に取り組んでいます。

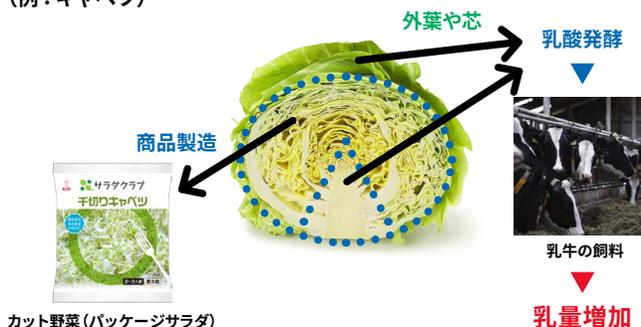
惣菜工場であるハンシンデリカは、2002年より生産工程で発生する野菜の未利用部位を養豚業者に提供し飼料化しています。この飼料で育った豚肉は「瀬戸内ポーク」というブランドで高品位な豚肉として流通しています。

2017年度、カット野菜工場のグリーンメッセージでは、これまで事業規模では難しいとされたキャベツ・レタスの葉物野菜の飼料化に成功しました。東京農工大学とキューピーの共同研究*で、この飼料を与えた乳牛は乳量が増加することが報告されています。

今後も、野菜の未利用部位をより有効に活用する方法を探求します。

*日本畜産学会第124回大会(2018年3月)発表

野菜の未利用部位の有効活用 (例:キャベツ)

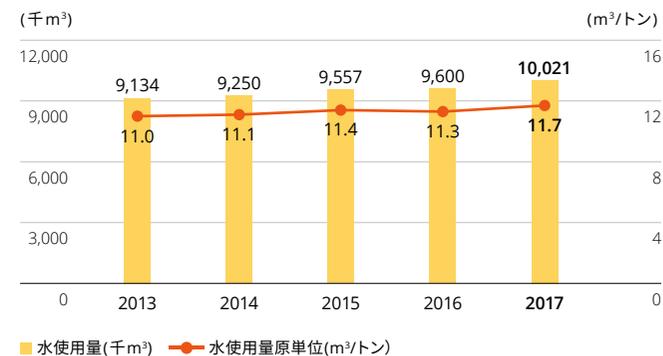


水資源の効率的活用

キューピーグループでは、製造の各段階における節水と排水の浄化を徹底しています。また、将来の水資源の逼迫に備えて、新たに高度処理技術などを導入して、再生水の利用による取水・排水の削減を推進しています。

2017年度、キューピーグループ工場の水使用量は、総量10,021千m³で前年度より4.4%増加、生産数量1トン当たりの水使用量(原単位)は11.7m³で前年度より3.5%の増加となりました。

水使用量



容器包装の軽量化・簡略化

商品の容器包装は、商品の品質を保ったまま、おいしく食べていただくために欠かせないものですが、生産する際にエネルギーを消費し、ご使用後は廃棄物となります。キューピーグループでは容器包装の軽量・簡素化を重点課題の一つと考え、継続的に活動しています。

容器包装選定の基本方針

- 食品の容器として適切であること
- 環境汚染物質を発生させないこと
- 省資源・省エネルギーに努め、多重包装はなくすこと
- リサイクルへの適正を向上させ、促進すること
- 環境に配慮した包装技術の確立に努めること

● 配送陳列用紙箱の簡略化

サラダクラブシリーズで新たに採用した「シェルフ・レディ・パッケージ」は、開けやすくそのまま店頭で陳列できるカートンです。従来の内箱・段ボールの2重構成から内箱を廃止し、段ボールのみとしたことで、製造面、配送面においてCO₂排出量を76.8%削減することができました。



開封前



開封後

賞味期間延長によるロス削減

食品ロスの削減は、世界的な課題となっています。この食品ロスの中には、家庭内ストックの賞味期限切れによる廃棄分も含まれています。キューピーグループでは、製法や容器包装の改良による賞味期間延長を通じて、食品ロス削減に貢献していきます。

● マヨネーズの賞味期間延長

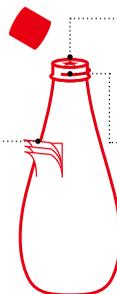
マヨネーズを長期間保存した場合、酸素などの影響により品位が低下することがあります。「キューピー マヨネーズ」は発売以来、酸素を通しにくい多層容器採用や、植物油中に溶け込んでいる酸素を限りなく取り除いた「おいしさロングラン製法」の導入、製造工程中の酸素レベルの低域など、製法・容器でさまざまな工夫をしてきました。また「キューピーハーフ」では、配合の変更により品位を向上させることに成功しました。これらにより、「キューピー マヨネーズ(50g~450g)」「キューピーハーフ」の賞味期間を、従来の10カ月から12カ月に延長することができました。

POINT1

生産中に酸素を混ぜない
「真空ミキサー」

POINT2

酸素を通しにくい
「多層容器」



POINT3

「アルミシール」による
外部酸素の遮断



POINT4

製品中の酸素を減らす
「口部の窒素置換」



POINT5

植物油から酸素を
限りなく取り除いた
「おいしさロングラン製法」

● カット野菜(パッケージサラダ)の消費期限延長

カット野菜(パッケージサラダ)を製造・販売するサラダクラブは、2015年4月より、主力商品の千切りキャベツ、ミックスサラダ(ピックパック含む)の消費期限を一日延長しました。キューピーで特許を取得している「野菜にやさしい製法(特許4994524号)」の使用に加え、これまでサラダクラブが力を入れて取り組んできたコールドチェーン(低温管理)、機能性のある包装フィルムの採用等により、日持ち延長が可能となりました。



地球温暖化の防止

バリューチェーンを通じたCO₂削減活動

地球温暖化の防止は人類共通の課題です。キューピーグループでは地球温暖化の原因となるCO₂排出量の削減のため、調達、生産、物流、販売、オフィスの各段階において、省エネルギーやエネルギー転換など積極的に取り組んでいます。

バリューチェーンにおけるCO₂排出量(2017年度)

スコープ	CO ₂ 排出量(千トン-CO ₂)
スコープ1 燃料	84.0
スコープ2 購入電力	130.1
スコープ3 カテゴリ4 輸送	35.7

スコープ1、2 国内生産事業所・オフィス
スコープ3 省エネ法の定期改善の対象2社

生産部門のCO₂排出削減

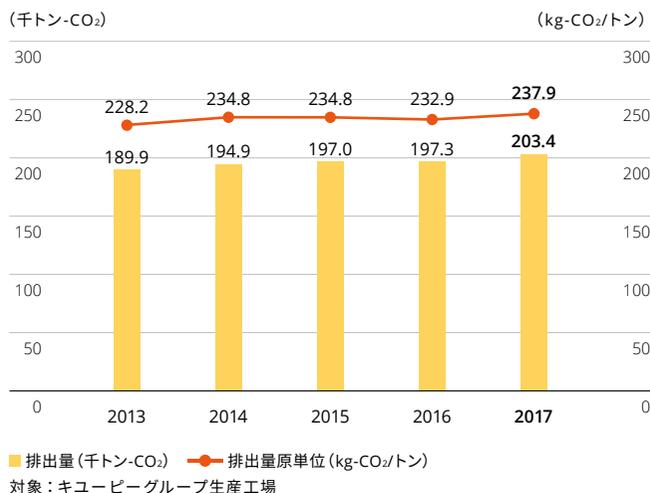
キューピーグループでは、製造工程での効率改善、設備の導入などによる省エネルギーを基本として、A重油から都市ガス・天然ガスへの燃料転換、コージェネレーション(熱電併給)や太陽光発電の利用を進めています。また、グループ事業所での優れた取り組み事例を共有・展開することによってCO₂排出削減に努めています。

生産部門のCO₂排出削減目標

- 総量 前年比減
- 生産数量あたり原単位 前年比1%減

2017年度、キューピーグループ生産工場でのエネルギー使用に伴うCO₂排出量は、総量203.4千トンで前年度より3.1%増加、生産数量1トン当たりのCO₂排出量(原単位)は237.9kgで前年度より2.2%増加となりました。

CO₂排出量



CO₂量換算に用いた係数(2013年度から固定)
地球温暖化対策の推進に関する法律施行令(2002年12月改正)、エネルギー源別標準発熱量表(2002年2月 資源エネルギー庁)および、電気事業者別の排出係数(2011年度実績、経済産業省・環境省公表)より
購入電力：0.491kg-CO₂/kWh
A重油：2.710kg-CO₂/L
都市ガス(13A)：2.188kg-CO₂/m³
LPG：6.007kg-CO₂/m³

生産部門の省エネルギーの推進

キューピーグループでは、生産事業所の各工程にエネルギー測定装置を設置するなど「エネルギー使用の見える化」を進め、設備運用改善・メンテナンスの徹底、省エネ型機器の導入をグループ全体で展開して、省エネルギーを推進しています。

2017年度、キューピーグループ生産工場のエネルギー使用量は熱量換算3,971千GJで前年度より3.0%増加しました。生産数量1トン当たりのエネルギー使用量(原単位)は熱量換算で4.65GJとなり、前年度より2.1%の増加となりました。

再生可能エネルギーの活用

キューピーグループでは、2013年3月の「キューソー流通システム」松戸営業所・伊丹第三営業所への太陽光発電システム設置を皮切りに、再生可能エネルギー普及に向けた取り組みを開始しました。太陽光発電システムは10拠点到導入され、発電量は4,500MWh、これはグループ生産部門の電力使用量の約2%に相当します(2017年11月現在)。また、アヲハタでは、2005年より地中冷熱利用による熱交換冷却システムを活用しています。

物流部門のCO₂排出削減

キューピーグループでは、お取引先やグループ会社と連携し、原料の輸送から商品の配送にいたるまで、すべての輸配送で環境負荷低減に取り組んでいます。

2017年度は、輸配送量に対しCO₂排出量を削減することができました。

キューピー

	2016年度	2017年度	前年度比
輸配送量(千トンキロ)	157,638	154,240	97.8%
CO ₂ 排出量(トン)	25,295	24,956	98.7%

キューピータマゴ

	2016年度	2017年度	前年度比
輸配送量(千トンキロ)	49,887	50,973	102.2%
CO ₂ 排出量(トン)	10,392	10,729	103.2%

※省エネ法の定期報告の対象2社について報告しています

輸配送効率化の推進

輸配送距離の短縮化と輸配送ロット効率の向上(=積載効率の向上)により輸配送効率化に取り組んでいます。

- 配送地域に応じた生産拠点の最適化
- 輸送・配送ロット効率の向上による配送頻度の削減
- 中継輸送の抑制
- 商品在庫の適正化による外部倉庫の使用抑制

輸送事業者としてのCO₂排出量の削減活動

国内における食品物流最大手であり、キューピーグループの商品の保管・輸配送業務を担っているキューソー流通システムでは、空車情報管理システム(求貨求車システム)の活用により空車を削減するとともに、共同配送の推進により積載効率を向上させています。また、-25℃～+25℃まで荷量に応じて荷室のスペースを自在に変更できる、常温・チルド・冷凍の3温度帯のフレキシブル車両の導入を推進し、共同配送の効率化を図っています。



共同配送の効率化を実現するフレキシブル車両の導入

エコドライブの推進

2004年から本格的にデジタルタコグラフ*を導入し、現在、運送車両の90%以上の車両に装着しています。デジタルタコグラフでの評価データをもとにドライバーへの指導を行い、安全運転の強化、事故未然防止、マナー・燃費の向上に取り組んでいます。

* デジタルタコグラフ: 運転記録(距離・時間・速度・温度など)の装置

TOPICS

モーダルシフトの取り組み

専用31フィートコンテナ6基を導入し、輸送事業者と連携してモーダルシフト*1を推進しています。モーダルシフト化率*2は2015年度16%、2016年度31%、2017年度40%となっています。2018年度は50%を目標としています。

*1 モーダルシフト: 500km以上の長距離トラック輸送を鉄道・船舶でのコンテナ輸送へ転換すること

*2 モーダルシフト化率: 500km以上の輸送トン数に対し、鉄道や船舶による輸送トン数の比率



鉄道・船舶積載用31フィートコンテナを6基導入し、輸送事業者と連携してモーダルシフトを進めています

モーダルシフト化率の推移



オフィスのCO₂排出削減

キューピーグループは、2013年10月の仙川キューポート新設を皮切りに、本社・研究部門を中心としたオフィス事業所の集約・移転を進めています。省エネ設計・設備の導入とともに、オフィス事業所間の連携により、省エネ性能を十分に発揮するためのノウハウの共有や運用改善、改修を継続的に進めています。

● 渋谷オフィスの取り組み

キューピーグループの渋谷オフィス(渋谷董友ビル)は、ビル全体を2重のガラスが覆い(ダブルスキン)、ガラス間を自然換気することで高い断熱性を実現しています。また、高効率空調機やLED照明といった省エネ設備も導入しています。

これらの環境設計により、建築総合環境評価システム「CASBEE」の総合評価Aランクに認定されています。また、グリーンファイナンス促進利子補給金交付決定事業*に採用されています。

* グリーンファイナンス促進利子補給金交付決定事業:環境省が公募した、地球温暖化対策のための設備投資の事業に係る融資に対する利子の一部を補給する対象となる事業



2重ガラスが覆う(ダブルスキン)外観

● 仙川キューポートでの省エネルギーの推進

仙川キューポートでは、吹き抜けを活用した自然換気システム、コジェネレーションシステム、太陽光発電、LED照明などを導入しています。省エネ設計性能を最大化するため、設備メーカーとの連携を深めるとともに、仙川キューポートに勤務する多くの社員に聞き取りなどを行うことで、運用精度の向上を図っています。



自然換気システム

● グループ会社の取り組み

キューソー流通システム本社ビルでは、通路などのLED照明をセンサーで自動制御するなどの省エネ施策を導入しています。また、テレビモニター(サイネージ)を設置し、各フロアでの電気使用量をリアルタイムで表示するなど、「見える化」により、従業員の意識づけを行っています。



フロア電力消費量・金額を表示するサイネージ

キューピーグループのKEY DATA

卵殻発生量 年間約2万8千トン

100%再資源化

太陽光発電 グループ10拠点発電量

4,500 MWh
グループ生産事業所電力使用量 2%

モーダルシフト化率
(2017年度実績)

40.0%
2018年度目標 50%達成

自然環境の保全

自然環境の保全の考え方

キューピーグループの事業活動は、豊かな自然環境と密接な関わりを持っています。私たちは、「良い商品は良い原料からしか生まれない」という考えを大切に、原料を生み出す自然の恵みに感謝し、豊かな自然と生物多様性の保全に努め、持続可能な社会を次世代につないでいきます。

工場における生物多様性保全

富士吉田キューピーは、国立公園内に立地しています。保護地域内や隣接地域でもあるため、敷地内で自然の整備や水資源を涵養する緑地面積の確保、日照に恵まれた立地を活かし、再生可能エネルギーを取り入れるなど自然保全に向けた取り組みを行っています。

今後は、事業活動と自然環境の関連について評価し分析するとともに、地域の皆様との情報共有を通じて、取り組むべき活動を策定し実施していきます。



富士吉田キューピーに設置した太陽光パネル

キューピーの森

キューピーグループは、2007年9月より山梨県富士吉田市の富士北麓にある森林「キューピーの森」で、水源涵養を目的とした森林保全活動を開始しました。社員とその家族から参加者を募り、間伐・植樹活動を中心に、森林散策、地元食材を用いた料理体験などを行ってきました。

第3期となる2016年度からは、森林保全活動とともに、周辺環境が抱える諸問題について参加者に知っていただくことを目的に、専門家から自然環境や生息する生き物について学ぶ講座も開設しました。

2017年度は、間伐材の資源循環利用を目的に木製スプーンやコースターづくりなどの木材加工を体験して、自然の恵みとその活用法について学びました。



キューピーの森での参加者集合写真と間伐している様子

霧多布湿原ナショナルトラストへの支援

国内3番目の面積をもつ霧多布湿原は、その価値が国際的に評価され、1993年にラムサール条約に登録されています。キューピーグループは、この貴重な自然を保全する活動を行う認定NPO法人霧多布湿原ナショナルトラストを資金面で支援するとともに、2014年からは年1回社員が参加し、湿原を中心とした保全活動を実施しています。

2017年度は、地元の「きりたっぷ子ども自然クラブ」の子どもたちにも参加してもらい、湿原に隣接する小学校のスケートリンク場として使われていた人工池「はぐくみの池*」の生態調査を行いました。その結果、環境省レッドリストの絶滅のおそれのある種であるババアメンゴなどの棲息を確認できました。

* はぐくみの池：小学校閉鎖により埋め立て予定でしたが、水鳥たちが飛来することから霧多布湿原ナショナルトラストで保全を開始。キューピーグループの支援活動に対する評価と今後への期待から、池の命名権を授与され、2016年社内公募の結果、命名されました。



はぐくみの池で生態調査をしている様子